岡山県立短期大学紀要　37巻　27～33頁（1992）

漱石と子規

――『夢十夜』の「第二夜」を中心に――

柴田奈美

はじめに

『夢十夜』は、明治四十一年七月二十五日から八月五日まで、東京、大阪朝日新聞に連載された。（ただし、「大阪朝日」は七月二十六日から）。

『坑夫』と『三四郎』の中間で書かれた小品であり、一種の肩の凝らない読み物を提供する意図も窺われるが、最近、漱石の長編小説の主題とも密接に関わる点において、研究者の関心が集中している作品である。

『夢十夜』について、様々な研究がなされている中で、「第二夜」は主題についての言及の少ない話の一つであろう。

「第二夜」が、漱石自身の参禅体験が根底にあり、長編小説の『門』に関連する作品ということは、定説となっている。しかし、「武士の面目に仮託して、猶予された時間の切迫にともなう危機感や挫折感の表白には、円覚寺体験を越えた過激な気配が感じられる」（「夏目漱石辞典」三好行雄編　学燈社）や「この作における和尚の役割は何かなどの問題についてはまだ明確な認識が成立していないようだ」（笹淵友一『夏目漱石――「夢十夜」論ほか――』明治書院　昭61・2・25）という指摘のとおり、さらに異なるものが潜んでいると考えられる。

笹淵氏は、この主題を、和尚の首をとるために悟りをえようとする心理の自己矛盾、とされた。そして、求道心と虚栄心の矛盾を大きくし、その印象を大きくする意図から「自分」を侍とし、和尚は、侍を侮辱することによって、彼の求道心が真剣でないことを反省させ、自己に対して発憤させようとする、毒舌家ではあるが、善意の人間であるとされた。

この論は、十分首肯できるのであるが、本論ではそれとは違った角度から考察していき、漱石の深淵部に迫りたい。

一、

「第二夜」において不審な点は、次の三点である。

その一つは、「お前は侍である。侍なら悟れぬ筈はなからうと和尚が云つた。さう何日迄も悟れぬ所を以て見ると、御前は侍であるまいと言つた。人間の屑ぢやと言つた。はゝあ怒つたなと云つて笑つた。口惜しいければ悟つた證據を持つて来いと云つてぷいと向をむいた」という、和尚の和尚らしからぬもの言いである。

二つ目は、「隣の広間の床に据ゑてある置時計が次の刻を打つ迄には、屹度悟つて見せる。悟つた上で、今夜又入室する。さうして和尚の首と悟りと引替にしてやる。悟らなければ、和尚の命が取れない。どうしても悟らなければならない。自分は侍である」「もし悟れなければ自刃する。侍が辱しめられて、生きて居る訳には行かない」という、侍であることにこだわり、かえって悟りの境地から遠のいてしまう「侍」の言動である。

三つ目は、参禅者を導くべき和尚が、憎々しい物云いをし、「怪しからん坊主」といつた表現に見られるとおり、「侍」の憎悪の対象となっていることである。

ここで注目したいのは、「お前は侍である。侍なら悟れぬ筈はなからうと和尚が云つた。人間の屑ぢやと言つた」「どうしても悟らなければならない。自分は侍である」と、和尚も「自分」も侍であることを強調している点である。

悟りをひらくことのできない苦悩と焦燥は、「門」や「行人」によく描かれているが、この「侍」へのこだわりは、どう解釈すればよいのであろうか。近代の知識人のプライドを、単に侍のプライドに置き換えただけなのであろうか。

ここで、漱石の「侍」についてのこだわりについて考える時、親友の正岡子規の存在が、大きく浮かびあがってくる。

明治二十四年に、子規は『明治豪傑譚』に自説の「気節論」を添えて、漱石の許に送りつけた。

『明治豪傑譚』は、「読売新聞」に明治二十四年七月一日から十一月二十日まで連載された読みもの「明治豪傑譚ものがたり」を三巻にまとめて、東京堂から単行本として発行されたもの。中に描かれた人物は、殆どが武士である。

「気節論」は現在残されていないが、明治二十三年の、英雄について子規が述べた次の文章から、「気節」が意志に属するものとした内容であったと考えられる。

「人間の意志（Will）の強いやつが所謂英雄豪傑となり、意志の弱いやつが卑怯者とてそしらるるなり」（「下手の長談義」「筆まかせ」）。

この書物と「気節論」を送られた漱石は、子規の強い士族意識に反発し、明治二十四年十一月七日の子規宛書簡の中で、次のように激しく反論している。

まず、『明治豪傑譚』については、事件の内容を「即座の頓智」「其場の激情」「失策話しか尋常一様の世間話し」の三つに大別し、それらは全て気節とは言い難いとする。そして、「小生元来大兄を以て吾が朋友中一見識を有し自己の定見に由って人生の航路に舵をとるものと信じ居候其信じきりたる朋友がかゝる小供だましの小冊子を以て気節の手本にせよとてわざわざ恵投せられたるはつやつや其意を得ず」と、子規を非難している。

次に、「気節論」については、次のように述べている。

「人間の能力は智、情、意の三者に外ならず気節は人間能力の一部なる以上は三者の中何にか属せざるべからず」その中の情、意には属さず、「気節の属する処は智の範囲内にあらずんばあらず親には孝を尽くすべき理ありと心得て孝を尽くす是気節なり君に忠を致すべき道存すとて忠を致す是気節なり」「僕謂ふ気節は情に属せず意に属せずして智に属す而して大気節は人生を掩ふ大見識に属すと」。

子規の述べた意志を中核とした気節論に対し、漱石は智を中核とした気節論を主張していることがわかる。

また、子規の「学校の児童を見よ工商の子多くは上座にあり士家の子多くは末席にあり然れども其学校を出づるや工商の子弟は終に士家の子弟に（一籌を）輸するを常とす」と士族意識による人物評価に対しては、次のように反論している。

「気節の有無抔は教育次第にて工商の子なりとて相応の教育を為し一個の見識を養生せしめば敢て士家の子弟に劣らんとも覚えず暫らく気節は士人の子の手に落ち工商の夢視せざる處とするも是は工商たるが為に気節なきにあらずして気節を涵養するの時機に会せざりしのみ」「君の議論は工商の子たるが故に気節なしとて四民の階級を以て人間の尊卑を分たんかの如くに聞こゆ君何が故かゝる貴族的の言語を吐くや君若しかく云はゞ吾之に抗して工商の肩を持たんと欲す」。

子規は気節というものを、士族階級の独自の精神で意志的なものとし、この武士的気節を漱石にも持つようにと、『明治豪傑譚』と「気節論」を漱石に送ったが、漱石は気節を、教育によって養われる智的なものであると主張したことがわかる。この書簡全体からは、平民出身の漱石が、子規の士族意識を不愉快に感じ、親友子規のこの一面に憎悪の気持ちを抱いたことがうかがわれる。

この書簡で、気節の有無は身分に関係しないとし、子規の士族意識を非難した漱石であるが、一方、森田草平の『続夏目漱石』（養徳社　昭18・11）によると、木曜会の席上で次のように語っている。

「夏目の家が甲州の落武者で、その後、武州の岩槻候に仕へ、更に牛籠村に引退してその他の名主となった」。

ここに、士族につながる血へのこだわり、あこがれ、裏返せばコンプレックスが読みとれるのではないだろうか。

「第二夜」に話をもどすと、「自分」が侍であることは、この漱石の武士の血へのあこがれであり、「屹度悟つて見せる」「自分は侍である」には、「武士」へのこだわりが潜んでいると考える。和尚に嘲笑されて、なかなか悟れず苦悩するところには、侍であることを証明できない苦悩、あるいは士族へのコンプレックスが表れているのではないであろうか。

一方、「自分」を罵る和尚は、士族意識の強い子規の一面の象徴ではないかと考える。

「人間の意志（Will）の強いやつが所謂英雄豪傑となり、意志の弱いやつ

が卑怯者とてそしらるるなり」（前　出）と述べた子規の一面が、漱石の裡で黒い影となり、「侍なら悟れぬ筈はなからう」「さう何日迄も悟れぬ所を以てみると、御前は侍ではあるまい」「人間の屑ぢや」と和尚に言わしめたのであろう。

「はゝあ怒ったなと云つて笑つた」「鰐口を開いて嘲笑つた」という表現には、「子規は冷笑が好きな男であつた」（「京に着ける夕」明40・9～11日）という漱石の生前の子規の印象が反映しているように思われる。

この「第二夜」に色濃く表れた、侍の血への執着は、「第五夜」「第九夜」にも影響していることが指摘できる。

「第五夜」の場合は、「自分」は神代の時代の戦士で、捕虜となっている。命乞いなどはせず、武士らしく「生」よりも「死」を選ぶところに、侍であることの意地が感じられる。「第九夜」の場合は、「自分」は維新前後頃の武士の子どもという設定である。こういった点に、武士への血へのあこがれが読みとれよう。

さらに、気節論の反論が明治二十四年十一月七日の出来事で、鎌倉円覚寺における漱石の参禅は、その後の明治二十七年末から翌年の正月にかけての出来事であったことが指摘できる。

このことから、この参禅で悟れなかったことによる挫折感は、大きく漱石の心に影を落としたものと考えられる。ここに、参禅体験と侍であるとこへのこだわりとを重ねて「第二夜」を描いた、漱石の暗い部分が読みとれるのではないだろうか。

ところで、子規の黒い影に苦悩する「自分」をこういう形で描いたということは、どういうことを意味するのであろうか。

まず、「夢十夜」執筆前後の漱石の文章から、子規に関する漱石の心情を探っておきたい。

明治三十九年十月執筆の「『我輩は猫である』中篇自序」には、次のようにある。

「子規はにくい男である。嘗て墨汁一滴か何かの中に、獨乙では姉崎や、藤代が獨乙語で演説をして大喝采を博してゐるのに漱石は倫敦の片田舎の下宿に燻つて、婆さんにいぢめられてゐると云ふ様な事をかいた。こんな事をかくときは、にくい男だが、書きたいことは多いが、苦しいから許してくれ玉へ抔と云はれると氣の毒で堪らない」「子規がいきて居たら『猫』を読んで何と云ふか知らぬ。或いは倫敦消息は読みたいが『猫』は御免だと逃げるかも分からない。然し『猫』は余を有名にした第一の作物である。有名になつた事が左程の自慢にはならぬが、墨汁一滴のうちで暗に余を激励した故人に対しては、此作を地下に寄するのが或いは恰好かも知れぬ」

子規の毒舌に、当時は「にくい男」と腹を立てた漱石であるが、この自序を書く時点では「暗に余を激励した」と好意的にとらえていることが指摘できる。

続いて明治四十年四月の「京に着ける夕」には、次のようにある。

「子規の骨が腐れつゝある今日に至つて、よもや、漱石が教師をやめて、新聞屋にならうとは思はなかつたらう」「新聞屋になつて、糺の森の奥に、哲学者と、禅居士と、若い坊主頭と、古い坊主頭と、一所に、ひつそり閑と暮らして居ると聞いたら、それはと驚くだらう。矢つ張り気取つてゐるんだと冷笑するかも知れぬ。子規は冷笑が好きな男であつた」

これらの表現には、子規が無くなって五年経った時点で、親友であった子規を、漱石らしいテレ隠しの表現を混ぜながら、しみじみと回想している様子がうかがわれる。「子規は冷笑が好きな男であつた」という回想にも、余裕が感じられる。

さらに、明治四十一年九月の「正岡子規」では、次のように回想している。

「彼は僕などより早熟で、いやに哲学などを振り廻すものだから、僕などは恐れを為してゐた。僕はさういふ方に少しも発達せず、まるでわからん処へ持つて来て、彼はハルトマンの哲学者か何かを持ち込み、大分振り廻してゐた。尤も厚い独逸書で、外国にゐる加藤恒忠氏に送つて貰つたもので、ろくに読めもせぬものを頻りにひつくりかへしてゐた。幼稚な正岡が其を振り廻すのに恐れを為してゐた程、こちらは愈々幼稚なものであつた」「妙に気位の高かつた男で、僕なども一緒に矢張り気位の高い仲間であつた。ところが今から考へると、両方共それ程えらいものでも無かつた。といつて徒らに吹き飛ばすわけで

は無かった。当人は事実をいつてゐるので、事実えらいと思つてゐたのだ」。

漱石が社会的地位の確立した時点での回想で、しかも談話記事のため、おもしろおかしく表現しているようだが、当時は子規の大きさに圧倒されていた漱石の様子と、当時の子規と漱石自身を、余裕をもって客観的に回想している漱石の心境がよみとれる。

当時は、早熟な子規に対して「恐れをなしていた」漱石であるが、英国留学中に自己本位の精神を獲得し、子規没後、小説家としての地歩を占めていく。

次に、「夢十夜」発表前の、漱石の主な文筆活動を挙げておきたい。

まず、明治三十八年には「吾輩は猫である」が「ホトトギス」に発表され、世評をよんだ。続いて、「幻影の盾」「琴のそら音」「一夜」等を発表し、文名が確立した。

明治三十九年には、「坊ちゃん」を「ホトトギス」に、「草枕」を「新小説」に発表した。

明治四十年には、大学、高校に辞表を提出し、「朝日新聞」に入社。「虞美人草」を「朝日新聞」に連載した。

明治四十一年には、「坑夫」を連載し、「文鳥」「夢十夜」の発表へと続いた。

このように、漱石にとって、明治四十一年という時期は、教師をやめて小説家に転身し成功をなしとげられたことを、実感できる時期であったといえよう。

また、明治三十年四月二十三日付の子規宛書簡には、次のような自分の希望を述べていた。

「教師をやめて単に文学的の生活を送りたきなり　換言すれば文学三昧にて消光したきなり　月々五六十の収入あれば今にも東京へ帰りて勝手な風流を仕る覚悟なれど遊んで居つて金が懐中に舞ひ込むといふ訳にもゆかねば衣食丈は小々堪忍辛抱して何かの種を探し（但し教師を除ク）其余暇を以て自由な書を読み自由な事を言ひ自由な事を書かゝん事を希望致候」。

この希望が、十年後にして実現したわけであり、達成感を味わった時期であるともいえよう。

このことは、子規の大きな影に精神的に押さえつけられていた過去の自分と、自分に影を落としていた子規の一面とを、冷静に眺められる時期に達していたことを意味すると考えられる。

明治三十九年四月発表の「坊ちゃん」の中には、松山への嫌悪感が読みとれ、注「坊ちゃん」に感情移入した漱石に余裕の感じられないのは、「坊ちゃん」執筆時点では、まだ子規の大きな影を越えられていなかったからであろう。

以上のことから、明治四十一年に「第二夜」の書かれたことは、子規の大きな影に悩まされていた、過去の自分の小ささを、ある程度客観的に見つめることができ、子規の影を越えることのできたことを意味するのではないかと考える。

「坊ちゃん」のように、松山を笑いとばし軽蔑して表現するのではなく、「侍」の苦悩をつきつめて描くことができたのは、和尚と侍――すなわち、過去の子規に対して反発を感じる部分と、幼稚であった自分の心のわだかまりの様子を、客観的に回顧することが可能になったためと考えるのである。

二、

「第二夜」において、子規を越えることのできた漱石は、文学者として実りをみせた子規の理論を、気負いを捨てて受容できたのではないかということが考えられる。「第六夜」の中に、その点を指摘したい。

「第六夜」は、明治の時代に、運慶が木から仁王を掘り出している話である。運慶を囲んで、多くの明治の人間が見物している。「其の中でも車夫が一番多い」「余程無教育な男と見える」という周囲の人々を見くびった描写の中で、「自分」と同等、あるいはそれ以上の存在として、「一人の若い男」を登場させている。次に引用したい。

（前略）仰向いて此（運慶）の態度を眺めて居た一人の若い男が、自分の方を振り向いて、

「流石は運慶だな。眼中に我々なしだ。天下の英雄はたゞ仁王と我れとあるのみと云ふ態度だ。天晴れだ」と云つて賞め出した。

自分は此言葉を面白いと思つた。それで一寸若い男の方を見ると、若い男は、すかさず、

「あの鑿と槌の使ひ方を見給へ。大自在の妙境に達してゐる」と云つた。

（中略）

「能くあゝ無造作に鑿を使つて、思ふ様な眉や鼻が出来るものだな」と自分はあんまり感心したから独言の様に言つた。するとさつきの若い男が、「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るなぢやない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋まつてゐるのを、鑿と槌の力で掘り出す迄だ。丸で土の中から石を掘り出す様なものだから決して間違ふ筈はない」と云つた。

自分は此の時初めて彫刻とはそんなものかと思ひ出した。果してさうなら誰にでも出来る事だと思ひ出した。それで急に自分も仁王が彫つて見たくなつたから見物をやめて早速家へ帰つた。

この「若い男」は、他の無教養な明治の人間とは異なり、「自分」に「此の言葉を面白いと思」わせ、「彫刻とはそんなものかと思」わせ、さらに「急に自分も仁王が彫つて見たくな」らせるということから、芸術の面で「自分」に大きな影響を与えた人物として描かれている点に注目したい。

この点については、漱石を俳句という文学の道にいざなった子規像が、浮かびあがってくるように思われる。

特に、「彫刻とはそんなものか」と思わせた芸術観は、次に述べるとおり、子規の俳句、短歌、文章における「写生」論に重なっている。

子規は、「写生」の語を、明治二十七年「小日本」の挿絵画家として頼んだ中村不折によって教えられた。この写生は、美術学校の教授として招かれていた、イタリーの画家フオンタネージによって教えられていた浅井忠を経て、不折に伝わったものである。画の初歩的な方法で、小口からこつこつ写すこと、事物の取捨選択は認めるという点に特色があった。この「写生」を、次に引用するように、子規は文学創作の方法として応用した。

「初めは自己の美と感じたる事物を現はさんとすると共に、自己の感じたる結果を現さんとしたるを、終には自己の感じたる結果を現すことの蛇足なるを知り、単に美と感ぜしめたる客観の事物ばかりを現すに至るなり」（「我が俳句　美の主観的観察」世界之日本第三号　明29・8・25　二）

これは、天然の中に「美」があり、それを忠実に模写することにより、芸術作品が生まれてくるという主張で、旧派の俳句のもつ、観念性、理屈、穿ちなどを払い捨てる効果的な手段でもあった。

このような写生論を説くに至った、明治二十七年から明治二十九年という時期、とりわけ明治二十八年は、漱石が愛媛県尋常中学校教諭に就任し、子規に刺激されて俳句を作り、俳壇に進出した時期に重なっている。

この芸術観は、漱石には興味のあったものらしく、『三四郎』にも画家の原口の口を借りて紹介されているので、引用しておきたい。

「（前略）画工はね、心を描くんぢやない。心が外へ見世を出してゐる所を描くんだから見世さへ手落なく観察すれば、身代は自ら分かるものと、まあ、さうして置くんだね。見世で窺へない身代は画工の擔任区域以外と諦めべきものだよ。だから我々は肉ばかり描いてゐる。どんな肉を描いたつて、霊が籠らなければ、死肉だから、画として通用しない丈だ。そこで此里見さんの眼もね。里見さんの心を写す積で描いてゐるんぢやない。たゞ眼として描いてゐる。此眼が気に入つたから描いてゐる。此眼の恰好だの、二重瞼の影だの、眸の深さだの、何でも僕に見える所丈を残りなく描いて行く。すると偶然の結果として、一種の表情が出て来る。もし出て来なければ、僕の色の出し具合が悪かつたか、恰好の取り方が間違つてゐたか、何方かになる。現にあの色あの形そのものが一種の表情なんだから仕方がない」

（中略）

三四郎は此画家の話を甚だ面白く感じた。

画家の原口の説明は、芸術家が自分の自我を無にして、対象物の中に美を見出し、対象物と一体化する創作態度と受け取れる。

この理論に対して、「第六夜」の「自分」が「初めて彫刻とはそんなものかと思ひ出し」「三四郎」が「甚だ面白く感じ」ているところに、子規の写生論が漱石に受容されていることが、指摘できるのではないだろうか。

ところで、談話記事「正岡子規」（明41）には、子規に俳句の手ほどきをしてもらっていた当時の回想が、次のように述べられている。

（前略）それから其『月の都』を露伴に見せたら、眉山、漣の比で無いと露伴もいつたかと言つて、自分も非常にえらいもののやうにいふものだから、其時分何も分からなかつた僕も、えらいもののやうに思つてゐた。あの時分から正岡には何時もごまかされてゐた。発句も近来漸く悟つたとかいつて、もう恐ろしい者は無いやうに言つてゐた。相変わらず僕は何も分からないのだから、小説同様えらいのだらうと思つてゐた。それから頻りに僕に発句を作れと強ひる。其家の向うに笹藪がある。それを句にするのだ、えゝかとか何とかいふ。こちらは何ともいはぬに、向うで極めてゐる。まあ子分のやうに人を扱ふのだなあ。

ここには、子規に正面きって反抗できないものの、子規から強いられているという、一種の圧迫感・反感を抱いていた、当時の漱石の心情がよみとれよう。

「第六夜」および「三四郎」に描かれた芸術観は、作句の指導を受ける時に度々子規から聞いた内容であると考えられるが、子規の「発句を作れと強ひる」「子分のやうに人を扱ふ」一面の圧迫感から脱け出せた時期に至った結果、肯定的に受け止められたものであろう。

三、

このような影響を漱石に与えた子規であったが、それでは、子規は漱石をどのように評価していたのであろうか。

漱石と子規との親交が始まったのは、「木屑録」（明22・10）に書かれた子規の跋によると、明治二十二年一月らしい。

この中に、「余は吾兄の英文に長ずることを知るや久かりしも」とあることから、子規は漱石を、英語のよく出来る同学年の一人として評価していたことがわかる。

さらに、この「木屑録」読後の感想として「余は初めて一益友を得たり」「吾兄の如きは千万年に一人のみ」と記した。英語のみではなく、漢詩文にまで通じていた漱石の多才な面を知り、共に語るに足る人物であると、高く評価したことがわかる。

この評価が、同年の「筆まかせ」では、漱石は「畏友」とされている。交際の深まりの中で、漱石の人間的な魅力に強くひかれ、畏敬の念を抱くに至った子規の気持ちの変化がわかる。

ところが、一方で、子規には大変我の強い、負けず嫌いな一面があった。漱石も「正岡子規」の中で述べているが、「妙に気位の高かつた男」「何でも大将にならなけりや承知しない男」であった。この一面のよく表れている例を、次に紹介したい。

子規が書いた小説『月の都』の評価について、子規自身は次のように漱石に述べていたことが、漱石の回想によって明らかである。

「『月の都』を露伴に見せたら、眉山、漣の比で無いと露伴もいつたとか言つて、自分も非常にえらいもののやうにいふものだから、其時分何も分からなかつた僕も、えらいもののやうに思つてゐた」（「正岡子規」明41）。

しかし、実際は、露伴は子規のこの作品を文壇に推挙せず、作品は高橋健三の手を通して、二葉亭四迷の許に渡った。ここでも推挙されず、結局子規の許へ戻されていたのである。

この「月の都」は、子規が明治二十四年の暮から同二十五年にかけて執筆したものである。表に「来客を謝す」という貼書をし、部屋に籠って「一枚かいてハやめ半分書いてハ筆を擲つこと幾度といふことをしらず」（明24・12・31付　虚子宛書簡）という状態で、情熱を込めて書かれたものであった。それだけに、この小説が世に出なかったことへの失望は大きかったに違いない。子規の二大弟子、碧梧桐と虚子に送った書簡には、次のようにある。

「拙著まづ、世に出る事、なかるべし」（明25・5・4付　碧梧桐宛書簡）。

「爾後露伴に関することは余り御記載被成ぬ様願ひ候」「僕は小説家となるを欲せず、詩人とならんことを欲す」（明25・5・4付　虚子宛書簡）。

弟子たちには、小説家への道を断念し、詩人となることを明言した子規であ

るが、漱石には「眉山、漣の比で無いと露伴もいつた」と述べていたのである。ここに、漱石に対して自分を誇示しようとする、子規の心の屈折が見られる。

「畏友」として、自ら高く評価した漱石であるからこそ、自分の弱みを見られたくなかったのではなかろうか。

ところで、漱石の「子規の画」（明44）という随筆の中に、次のような一文がある。

「子規は人間として、又文学者として、最も『拙』の欠乏した男であつた。永年彼と交際をした何の日にも、余は未だ曾て彼の拙に惚れ込んだ瞬間の場合さへ有たなかつた」。

「月の都」の件と併せ考えてみると、子規が意識して大きくした子規像の影に、漱石は圧迫感を受け続けていたといえるのではないだろうか。

おわりに

以上、本論では「夢十夜」の「第二夜」の解釈を中心に、漱石における子規の影の部分について考察した。まとめると、次の四点になろう。

一、「第二夜」における「侍であること」への執着は、子規との交流の中から生まれた士族の子規へのコンプレックスが原因ではなかったかということと、「和尚」は生前の子規に対し反感を感じる面を形象化したものではないかということ。

二、自分の分身としての「侍」の苦悩を、つきつめて描くことができたのは、「我輩は猫である」「坊ちゃん」の創作、教師から作家への転身に成功した時期を経て、精神的に子規の影を乗り越えられたからではないかということ。

三、また、その結果、子規の「写生」理論を小説の中に取り入れるという、漱石の余裕ある態度が見られるに至ったということ。

四、漱石を悩ました子規の「影」は、漱石を意識した子規が、自分を誇示しようとした結果生まれた、子規像の反映したものではなかったかということ。

注　松井利彦氏は『子規と漱石』（花神社　一九八六年十一月）所収の「漱石に於ける子規の翳――「坊ちゃん」考――」の中で、「漱石が、『今の僕は松山へ行った時の僕ではない』と述べている」「この実感をもつ過程で、『坊ちゃん』が書かれ、その中で極端な四国蔑視の立場をとることで、子規に対して抱いていた主体性のなさ、精神的な負い目からの脱脚を果したと思われる」と、『坊ちゃん』の一つの読みを提示されている。

参考文献

笹淵友一『夏目漱石――「夢十夜」論ほか――』明治書院　昭61・2・25
三好行雄編「夏目漱石辞典」学燈社　平2・7・10
松井利彦『子規と漱石』花神社　昭61・11
松井利彦編『俳句辞典・近代　増補版』桜楓社　昭57・5・20

※　本稿は、第七十一回東海近代文学会研究発表会での発表に基づいている。発表の折に、またその他の機会に、諸氏より様々なご教示と励ましをいただいた。記して謝辞に代えたい。

平成三年十二月六日受付
平成四年　二月六日受理